〔講演〕近世人としての大隈重信

大学史資料センター助教　檜　皮　瑞　樹

本日は皆様の前で、こうやってお話をさせていただく機会を与えていただいて大変感謝をしております。最初に、そのお礼を述べさせていただきたいと思います。さら、テントで見えなくなってしまっておりますが、大隈重信の銅像の前で、こうやって話をさせていただくというのも非常に感慨深いものがあります。

私が仕事をしておりますのは、早稲田大学の大学史資料センターというところで、何をやっているかと言いますと、名前のとおり、早稲田大学の歴史に関わること、あるいは大学の創設者である大隈重信、あるいはその大隈重信を助けた人々に関わる資料を収集し、その資料を基に大学の歴史や創設者の歴史というものを研究する、そういった機関であります。このような立場から、最初にこの銅像について簡単にお話をさせていただければと思います。

この佐賀の地にある大隈銅像というのは、実は早稲田大学の前身の東京専門学校に最初に作られた大隈銅像をモデルとし、初代の大隈銅像を非常に忠実に再現したものが、今ここにあるということです。ですから、一般にわれわれが、私もそうですが、「早稲田大学の大隈銅像」といってイメージするガウン姿の大隈重信とは違うものです。

では、この初代の大隈銅像のモデルとなった銅像は今どこにあるかといいますと、実はちゃんと早稲田大学の中に設置されています。しかしそれは、ほとんど人目に触れることのない、大隈講堂の北側に回廊があるのですが、その中にこのモデルになった、この銅像よりはるかに大きいサイズのものが、現在も設置をされています。手続きを取れ

ば見ることはできますので、ぜひ早稲田大学に行かれる機会がありましたら、この銅像のモデルになった、全くデザインは同じものですので、ご覧になっていただければと思います。

また、この大隈銅像も、初代と現在早稲田大学にあるものだけではなくて、日本中にさまざま大隈銅像が作られて設置されています。そういったことも、ちょっと今日は時間がありませんのでお話することはできませんが、この銅像というものも、ある意味では、歴史の中で現在ここに至っているということを最初にお話をさせていただきました。

今日のお話をさせていただくタイトルですが、「近世人としての大隈重信」というタイトルをつけさせていただきました。最初にこの演題、タイトルをごらんになったときに、ちょっと「おやっ」と皆様思われたかと思います。「近世人」という言葉自体、あまりなじみのない、聞いたことのない言葉かと思います。最初にまず私自身の自己紹介を含めて、今日どういうお話をさせていただくのか、どういう視点から大隈重信を見ようとしているのかということについて、まずお話をさせていただいて、そのうえで具体的な大隈の生涯、大隈評価といったものに関する、一つ新しい見方というものをお話できればというふうに思います。

先ほども申し上げましたように、私は早稲田大学の大学史資料センターというところで、大隈重信あるいは早稲田大学の資料を集め、それを基に研究を行っています。また、早稲田大学では「オープン教育センター」の科目ということで、全学部、全学年を対象にした「早稲田学」という講座を設けております。その中では、大隈重信の生涯を通して近代日本というものを学ぶ。あるいは早稲田大学、その前身である東京専門学校を含めた早稲田大学の歴史というものから、近代日本というものを照らして考えてみる。そういった講義を行なっています。

今年の四月から、私も「早稲田学」の担当ということで、学生に対してそのような講義をさせていただいているのですが、もう一方で私自身の研究の領域、フィールドというのは、江戸時代、特に一九世紀というふうに呼ばれる幕

末期を中心に、現在の北海道、当時は蝦夷地と呼ばれていた地域、そしてその先住民族であるアイヌという人たち、そういったことに関わる研究をしております。基本的には、いかに近代日本というものが蝦夷地、アイヌというものを支配していたのかというテーマで研究を行なっています。一方では早稲田大学、大隈重信の研究をしながら、もう一方では近世史、江戸時代というものの研究に軸を置きながら、日々研究活動をしております。

そういったことで、今日のお話というのは私のもう一つの足場である近世史研究という立場・視点から、大隈重信、あるいはこれまでの大隈研究といったものをちょっと捉え返してみようと考えています。一般的に大隈重信の研究というのは、基本的には近代史、特に日本近代政治史という立場から大隈重信を見ていくというのが、これまでのオーソドックスな見方かと思いますが、ちょっと視点をずらしてみて、近世史、あるいは近世史研究という立場から一度、大隈重信の評価なり生涯というものをちょっと捉え返してみようという試みとなります。その試みの一端というものを今日お話できればと思います。

次に、では「近世史から見る」というのはどういうことなのかということなのですが、一つには従来の明治維新史研究、あるいは「維新の功労者」と呼ばれる人たちに対する研究あるいは評価に対して、私が少し違和感を覚えている部分があるということです。その違和感が何かと言えば、この維新の功労者たちを評価しよう、顕彰しようとする際に、もちろん彼らは日本の近代国家の建設、あるいは日本の近代国家、近代的な政治システム、経済システム、社会システム全般を作り上げていくうえで非常に大きな役割を果たした、大隈重信も、もちろんその一人であることは言うまでもないことなのですが、彼らを評価する際に近代的な要素、文明的な要素というものを、いわば唯一無比の評価軸として用いること、あるいは彼らがあたかも古いもの・封建的なもの、近世の幕藩体制的な思想を全く脱ぎ捨ててしまって、そのうえで近代的な知識人として、あるいは近代的な新しい知識を導入していった、というふうなイ

メージで捉えようとしてしまっているのではないか、そういった研究のあり方、あるいは人物評価のあり方といったものに、少し近世史を学ぶ者からすると、大きな違和感があるということです。

例えばキーワードとすれば、「倒幕」だとか「文明化」だとか「グローバル化」っていうことが挙げられると思いますが、近年の明治維新史研究などでよく指摘されているように、幕末期の段階において、本当に幕府が倒れるというふうに考えていた人間はいないのではないかと言われています。それはいわゆる倒幕派と言われている人たちも、スローガンとしては「幕府を倒す」というふうなスローガンを掲げるわけですが、本当に幕府があんなにあっさりと消滅してしまうと思っていた人は、多分誰一人も存在しない。何か予言者のような人間でなければ、そういったことはありえないということがあります。

もちろん大隈重信をはじめとする維新の功労者といった人たちが、近代化に貢献したことは事実です。しかし幕末期から近代というものを、明確にビジョンを持って、あるいは幕府を倒すという、現実味を帯びたイメージを持って行動していたかというとそうではないというのが、近年の維新史研究で明らかにされてきています。

そういった意味で、近代的要素の反対にある近世的なもの、前近代的な評価・人物というのは、遅れた存在あるいは時代に乗り遅れているような人物じゃないかというふうに思われるかもしれませんが、実はそうではない。近世史の研究者の立場からすれば、近世的であること、あるいは前近代的であることには、何も引け目を感じることではない。そのような近世的な部分というのを高く評価するという方法もあるのではないかというのが、少し答えを先取りして言えば、そういったことを考えています。

近年のもう一つ近世史研究の成果として、新しい近世史像・イメージがあります。江戸時代のイメージとしては「暗く閉ざされた近世社会」というイメージを、もしかすると皆さんお持ちでいらっしゃるかもしれません。しかし、最

近の近世史研究では、実は日本の江戸時代、近世社会というのは、それほど暗く閉ざされた時代ではなかったのではないかということが強く主張されています。

例えば、先ほどの小学生、中学生の方のスピーチにも言葉として出てきて驚くのですが、「江戸時代は鎖国だった」と言説が一般的には定着しています。しかし、最近の近年史研究では「海禁体制」という言葉をあえて使うようにしています。というのも、「鎖国」というイメージが持つ、ある種閉ざされた空間としての近世社会というイメージとは異なり、近世社会というのは、もちろん限定的、制限はつきながらも、ある種外に開かれた社会だったと理解しています。あるいは、「身分制」と呼ばれているものも、従来のかっちりした強固な身分制ではなくて、ある種融通の利くルーズな社会構造としての身分だというふうな捉え方が主流となっています。極端に言ってしまいますと「明るい近世史」というようなものが最近は主流になりつつありますが、近世のイメージそのものが変わりつつあるということが、一方に存在します。

また、そういった近年の近世史研究からすると、近世社会というのは、もちろん限定つきではありますが、ある程度成熟した社会であり、近代化も近世を全否定して始まるのではなく、ある程度成熟していた近世の基盤の上に、近代というものを受け入れていったのではないかと捉えています。私の先生である深谷克己という研究者がいますが、深谷先生の言葉を借りれば、いわゆる東アジアに共通する政治文化というもの、そういった伝統あるいは在来的なものというものを基盤にしながら、西洋的なものを内面化していった。そういうふうに捉えていかないと、やはりこの時期の人物評価、人物研究というものが、一面的になってしまうのではないかと考えています。それは、単に封建的要素というものを全く駆逐し、西洋文明を一方的に受容する近代・近代人というものではない歴史の見方を、実は大隈重信評価に関してもそろそろ始めていくべきではないかということを考えています。大隈重信を近代人、あるいは

近代的要素という側面のみでやはり評価していくことは妥当ではないと考えています。

今日はそのような視点から、二つの事項についての試論をお話しさせていただきます。一つは「大隈重信評価の困難さをどう理解するのか」、二つめは大隈重信がその設立に深く関わった「東京専門学校の歴史的な位置付け」の問題です。その二つについて、これから少し考察を進めていきたいと思います。

まず「大隈重信の評価の困難さ」ということですが、これも、もしかすると「おやっ？」と思われたかもしれませんが、実は歴史学的に言うと、大隈重信の評価というのは大変難しいという部分があります。それは、大隈重信の評価が一言で言い表すことのできない側面があるということになります。一定しない大隈評価、言いかえれば大隈重信という人物の「つかみ所のなさ」と言えるでしょう。「大隈重信とはどういう人ですか」というふうに聞かれれば、一言で答えるのであれば、「日本の近代化にあらゆる側面から貢献した人です」と言えば大きく間違いではないと思います。

しかし、逆に「大隈重信は何をした人ですか」と聞かれると、これはちょっと答えに窮することがあります。大隈は本当に色々なことをした人物です。しかし、どれか一つを「これが大隈重信だ」ということ、「大隈重信がやったことの何か一つを挙げろ」と言われると、多分それぞれの立場の人がいろんなことをおっしゃると思います。それがある意味での大隈評価の難しさという部分だと思います。いわゆる一言で言いあらわすことのできない大隈重信の生涯、あるいは彼の生涯が歴史的に持った意味ということになります。これは決してマイナスの面ではないというふうに思っています。逆に言えば、一言で言い表すことのできる人物というのは、あまり魅力がないということができる訳ですね。一言で言いあらわせないからこそ、彼には非常に多様な側面があって、だからこそ評価が難しくなってしまっているのではないか言えます。

ではそれをもう少し掘り下げて考えていってみると、二つの要素が彼の評価の難しさ、あるいはつかみ所のなさ、といったものの原因になっているのではないかと考えられます。その一つが、大隈の生きた時代と彼の世代という問題、もう一つが、彼の多様な活動領域が抱えている問題です。皆さんご存じのように、大隈重信というのは天保九年（一八三八）に生まれて、大正一一年（一九二二）に亡くなっています。八四歳という生涯です。「当たり前だ。何を当たり前のことをいまさら」と思われたかもしれませんが、よくよく考えてみると、これは非常に重要なことなのです。もちろんその当時の平均寿命から考えて長いということは当たり前のことなのですが、大隈重信の場合、ただ長く生きただけではないということが、重要であり、彼の評価の難しさにつながっています。

もちろん最晩年にはもう政治から離れていますが、彼は亡くなる直前まで、実は社会的、政治的な人物として活動していた、あるいは彼が生きているということが、政治的、社会的な意味を持っていた人物です。ただ長かったというだけではなくて、その長さの中で、生涯にわたって政治的な、社会的な活動を行っているということであり、彼の八四年という生涯が非常に時代の大きな変化の中にすっぽり収まっているということが重要です。

ご存じのように佐賀藩に生まれて、幕藩体制といわれる近世社会の中で人格形成をしていく。そして明治維新という、政治体制、社会体制の大変革の中に身を置いた人物です。ほとんどの人物はこれぐらいで生涯を終えてしまいます。あるいは明治維新後に、明治政府の官僚として活動し、あるいは政治家として活動していく、このあたりで生涯を終えてしまう人も多いわけです。しかし、大隈はそこからさらに、日本の近代化と挫折、二度の対外戦争と植民地領有という、まさしく日本が国家として拡大・変容していく過程でも大きな役割を果たしている。あるいは、その後の大正デモクラシーと呼ばれる民衆の政治参加の要求、それを受け入れる形で、政党政治というものが作られていく時代にも深く関わっている。いわば、近世の最後から近代のデモクラシーまでという大きな歴史の変化の中で、彼が

生涯を送ったということです。

また、彼の評価を難しくしている要因として資料の問題があります。実は私たちは歴史研究者は歴史資料というものをもとにして大隈の生涯を考えざるをえないわけです。その際に、さまざまな資料があるわけですが、大隈の場合、彼が叙述したものももちろんありますが、その多くは彼が語ったこと、口述したことをもとに、大隈の思想、人間というものを考えて行かざるをえない。この口述というものが実は非常にやっかいなことをはらんでいます。それは、大隈の記憶が曖昧だというのではなくて、実は大隈が、彼が語った時点と、彼が語っている歴史の時点との間に、非常に大きな開きが出てきてしまっているのです。

例えば、幕末維新期のことについて、そのころの自分について語る大隈は、実はデモクラシーを経験してしまっているわけです。歴史学的には「体験の経験化」という言葉で最近は説明しますが、いわゆる「生」の体験というものがあって、それをその後何十年も経た時点でその人物が振り返って経験として捉え返していく。そこには必ず開きが生じてしまいます。その開きの時間が長ければ長いほど、彼が実際に自分自身に振り返る内容は、彼の「生」の体験とは大きく異なってしまわざるをえないということがあります。しかし、われわれは大隈が残した、ある種の語りというものをもとに歴史を作っていかなければいけない。そういったことが彼の評価を一つ難しくしている要素ではないかと思います。

もう一つが、彼の生まれた世代です。これは先ほどの近世人というところに深く関わります。彼は天保生まれです。天保生まれというのは、基本的には近世的な世界観の中で人格形成をしたと考えて間違いありません。それは思想、あるいは思考様式、あるいは行動規範と言ってもよいのですが、いわゆる彼が物事を発想するときのベースにあるもの、彼が意識しているか、無意識か、そういったことは別として、彼の人間としての基盤にあるものはやはり近世的

な価値観だということです。

このことは、幕末期、維新期に活躍した人物の世代というふうに考えてみると、いわゆる「文化文政期世代」とカトゴライズしてみましたが、例えば西郷隆盛、勝海舟、大久保利通のような人物、彼らはこの文化文政期、一八一〇年代から一八二〇年代の初めにかけて生まれた人物です。これらの人物はもう確実に近世人だと言うべきだと私は思っています。それに対して、嘉永安政期生まれというのは全く逆で、もう社会が大きく変わり始めていく中で人格形成をし、幕末維新、明治維新というものを一〇代の前半なり、あるいはもうちょっと幼い時期に過ごしている人物です。文化文政世代がある意味で、近世的な要素がかなり強い、それに対して嘉永安政期世代は最初から近代人として歩み始めるというふうに考えるならば、ちょうどその狭間にいる、近世的でもあり、しかし近代的なものも受容しているというのが、明治維新というものをほぼ三〇歳前後にむかえた世代の特徴ではないかと考えています。そして、大隈重信は明治維新期にちょうど三〇歳です。三〇歳でようやくといってしまっていいかどうか分かりませんが、初めて政治の表舞台に立つ。当時からすればスタートは少し遅い人物だったというのも、彼の特徴の一つだと言えます。

もう一つは彼の多様な活動領域についてです。これも、言わずもがなの部分ですが、彼の生涯というものを大きく四つの領域に分類するならば、政治家、官僚、教育家、文化人に分けることができます。政治家としては、ご存じのように二度の内閣総理大臣をつとめた、あるいは、外務大臣として条約改正交渉にあたった、あるいは、政府から追放されることをきっかけにしながら、政党の党首として活躍をしていく。そういった政治家としての側面があります。

それから官僚としては、特に維新の混乱期に外務官僚としての活動をスタートさせ、その後の財務官僚としての活動、それから鉄道施設事業などなど、皆さんご存じのさまざまな近代化の諸政策に官僚として関わっている。ただ大隈は、そうはいっても典型的なテクノクラート、いわゆる技術官僚ではありません。一つの自分の専門領域というも

のにこだわりながら、そこを極めていく、突き詰めていく人物ではありません。

それから、教育家というふうにしましたが、東京専門学校、早稲田大学の創設者であり、また同志社、日本女子大学、東洋女学校の創設への多大な支援、関わりというものがあります。ここで「教育家」としたのは、彼は「教育者」ではやはりありません。彼自身が教壇に立っているわけではないのですね。ただ教育の必要性、重要性というものを認めて、学校を創設する、あるいは学校を作りたいと考えている人たちへの支援を行っていた、教育家としての側面があります。

さらには、文化人としても非常に高い教養を兼ね備えた人物です。文明協会の設立もあります。南極探検事業への支援もあります。あるいは、メロン栽培とか蘭の収集などもあります。それは大隈重信が彼の自宅に温室を作って、そこでメロン栽培をしていたことですが、しかし、ただの物好きではありません。これは、いわゆる新しい技術の導入、新しい西洋的なものを積極的に受け入れていく、そういったことを、彼は実践しようとした。彼が実際に栽培したかどうかではなく、そういったものを自分自身のプライベートな空間においてでもやろうとしていた。ある種の文化人的側面というのがあると思います。

彼のこの多様な活動領域、一言で言いあらわせないような多様な活動というのをどういうふうに理解するのかと問題が生じますが、ここでは一つ「近世の武士像」、いわば武士的な要素から考えると、これは非常に分かりやすいんじゃないかと思います。なぜ彼がこれほど多様な領域で活躍し得たのかということを考えるときには、この視点から見てみると少し見えてくるのではないかと考えています。

いわゆる近世の武士というものがどういう存在であったかといえば、彼らは第一に「武人」、いわゆる軍事組織の一端として、一旦事があれば、近世の武士というのは当然軍事機構の一端として戦争というものを行わなければいけ

ない。一方で、近世の武士というのは、単に刀を振り回していただけの存在ではありません。行政官僚として、特に経済官僚として藩の財政に深く関わり、多くはその藩財政窮乏を立て直して行かなければいけない。そういった手腕を発揮しなければいけない。あるいは、武士というのはその一方では、司法官僚、法を支配している、あるいは裁きを行うという存在でもあるわけです。近世の武士とは、武人であり行政官僚であり、法務官僚でもあり、同時にその時代の最先端の文化人でもあらねばならない。彼らは近世社会における最高の教養を身につけた人物であり、だからこそオールマイティーな存在なのです。

現代のわれわれの感覚からすれば少し違和感があるかと思いますが、近世の武士というのは、非常にオールマイティーな存在というふうに考えるべきだろうと思います。そうすれば、大隈重信が近代以降、政治家、官僚、あるいは教育家、文化人として、さまざまな領域で活躍したというのは、近世の武士像から見ればごくごく当たり前のこととして理解できるのです。

では、どうしてわれわれが違和感を覚えるのかといえば、それは近代以降にこのさまざまな領域が細分化していくのです。官僚は官僚として生きる、文化人は文化人として生きる、あるいは教育家は教育家として生きる。そして、官僚養成機構としての大学が作られることによって、文官と武官が分離して文民統治が始まっていく中で専門領域が決まっていく。その専門領域自体が狭くなっていくのが近代だとすれば、大隈重信の人間性、あるいは活動というのは、やはり近世人的なあるいは近世武士的なオールマイティーさを持っているというふうに考えることができるのだろう思います。

それからもう一つ、大隈評価の難しさとして、レジュメには「大隈の融通無碍さ」というふうに書きましたが、彼のことを悪くいう人は「節操がない」という言い方をよく用います。ただ私は、この大隈の融通無碍さというのが、

彼の最大の魅力なのではないかというふうに考えています。大隈の特徴をひと言であらわすならば、「近世的な大人」、あるいは近世的な徳を有する人、近世的な意味での徳者、あるいは有徳人と言ってしまってもいいのかもしれないのですが、そういった要素を彼は非常に強く持っているのではないかと思います。その大隈を、近代的な合理性だとか整合性のみで評価しようとすると、逆に「節操がない」というふうに見えてしまうのではないかと考えています。

大隈自身の書いたもの、あるいは彼について書かれたものを読めば読むほど、実は彼は非常に近世の義侠的な性質を持った人物なのではないかと考えるようになりました。「来るものを拒まない」、あるいは頼られると断れない、と言ってしまうとただの「人がいい人」だとなってしまいますが、そうではない。困った人がいる、あるいは高い志を持っているけれども実現できないでいる人を見ると、どうしても手を差しのべたくなる、そういった義侠心的な精神を強く持っている人だったのではないか私はイメージしています。例えば、安部磯雄が中心に行った野球部のアメリカ遠征を支援する、あるいは、同志社を作った新島襄という高い教育理念を持った人物への継続した支援を行う、あるいは、早稲田大学を訪れた多くの人々を自邸に招き、饗宴を開催しごちそうを振る舞うわけです。

今日お配りした資料の中の四枚の写真があります。これは私が勤める大学史資料センターが現物を持っている写真で、ホームページ上で公開をしているものです。皆さんも実際インターネットがお使いになれれば、ご自宅でもご覧になることができます。「大隈邸」というキーワードで検索をかけると、三〇七枚が検索されますが、その中からアトランダムに選んでみました。

一番目は佐賀の女子師範学校の生徒を大隈邸に招いたもの、二番目は大隈重信と早稲田大学キリスト教関係者となっていますが、この写真の一番右端にいるのがベニンホフという、「早稲田奉仕園」というキリスト教主義的な寄宿舎を、大隈の支援によって作ったクリスチャンが写っています。あるいは三番目、四番目は、大隈が自分の邸宅、

温室や大隈邸に多くの学生を招いている写真です。このような写真が三百何枚ある。ということは、写真に残っていないものも含めれば、大隈というのは非常に多くの人物を自分の自宅に招いていることになります。その招かれた人は多様で一貫性がありません。クリスチャンであるベニンホフという牧師さんに非常に協力し、あるいは同志社の設立にも力を貸していますが、だからといって大隈がクリスチャンというわけではないのです。

このように、彼は助けを求められれば、やはりそれに手を貸すことが重要だと考えている。「近世的な義侠心」という言い方がどこまで正しいかどうか分かりませんが、そういった側面が非常に強いのです。あるいは、物事を考える際にも近代的な合理性を大隈はもちろん持っているのですが、そういった近代的・合理的な判断よりも義侠的な、近世的な価値観で物事を考えている。そういった部分が彼の一貫性のなさと批判される部分の裏側に存在するのではないかと考えるのです。

ただ、それは言い方を変えれば、前近代には前近代の合理性が、近世には近世なりの合理性がある存在するのです。だからこそ、われわれが大隈を近代的な合理性だけで理解しようとすると、「節操のない」というマイナスな評価になってしまうわけです。しかし、彼には彼なりの合理性が存在したのであり、その合理性というのは、近世的な合理性として捉えてみたらどうかと思うのです。

第二の課題は「東京専門学校の創設」です。これもご存じのように、大隈重信は明治一五年に東京専門学校を作るわけですが、これは、前年の「明治一四年の政変」という政治的クーデターによって大隈が政界から下野をする。大隈の立場からすれば下野ですが、政府から見ると大隈を追放したわけです。それが東京専門学校創設の直接のきっかけになります。

この東京専門学校は、実質的には大隈の学校です。土地も大隈家が所有していたものですし、学校運営費の多くも

大隈が援助をしています。ただ、実は大隈は自分が作った学校でありながら、学校から非常に距離を置いていました。いわゆる学校の要職には、初期においては一切その要職に就くことがありませんでした。開校式にも彼は出ていません。ただし、翌々年の第一回得業生と大隈が一緒に写った写真というのが実は存在します。ですから、大隈が一切大学に関わらなかったかというとそうでもない。資料から見ると、彼が開校の二年後には大学に行って、学生たちと写真を撮ったものがちゃんと残っていますので、いわゆる公式には関わることはなかった。恐らく大学には頻繁に来ていたんだろうと思います。しかし、公式的には大学とはかなり距離を置いていた。

公式に大学と関わるのは創立一五周年式典に参加して演説をしたのが最初ですし、大学の職という意味では明治四〇年の初代総長に就任するのが最初です。大隈は、大学ができてから二五年間は学校の要職に就くことがなかったのです。

なぜかといえば、これはもちろんよく知られている事実ですが、大隈が明治一四年の政変によって下野をしたことが深く関係しています。政府からすれば、自分たちが追放した大隈が学校を作ったということに対して非常に警戒心を持っていたのです。従来の大隈研究では、この政府の警戒・妨害を、大隈はそんなことは考えていなかった、政府が東京専門学校にスパイを送るような形で監視していたのは、政府の無理解なのだというふうに理化しているわけですが、これもちょっと疑問が残ります。

当時の事情に即して考えるならば、西郷隆盛の西南戦争を想起しなければなりません。彼が明治六年の政変によって政府から追放される。そして鹿児島に戻って、彼を慕い、彼に共感する若者たちが集まって私学校を作った。結局、最終的にはそれが政府反乱としての西南戦争を起こすわけです。この西南戦争は、東京専門学校創設の僅か五年前の出来事なのです。そういった私学校と政府反乱の記憶が生々しい時代に、大隈が東京専門学校を作ったということに

なります。

あるいは、薩長の政治家たち、政治的な要職にあった人物たちは、その多くが政治結社としての松下村塾の出身者たちなのです。松下村塾というのは、吉田松陰が作った「学校」であり、その出身者が幕末政局の一大勢力として活躍したのです。彼ら政府の要人もそのような私学校の出身なのです。このように、近世的な私塾というものが政治勢力となること、あるいはそれが結果的に反政府運動の担い手となったこと、幕末政局の一大勢力として活動したことは、彼らの記憶には非常に生々しく残っていたのです。そうであるゆえに、下野した大隈と彼を慕って集まる若者たち、小野梓、高田早苗を中心とした集団が彼らにとっての脅威であると認識されたことは、ある意味で非常に妥当だと考えなければいけないのです。

また、私塾的な側面ということにも着目しなければならない。先程も大隈重信が近世人的な素養を持ちながら近代化に関わってきたという話をしましたが、それは彼が創設に関わった、東京専門学校も重ね合わせていることを考えることができるのではないかと考えています。いわゆる近世的な私塾というものをイメージして東京専門学校を捉えていったほうが、東京専門学校の歴史的性格に迫れるのではないかと考えるのです。

私塾というのは創設者、その塾を作った個人との強固な精神的な結合を持っている。あるいは、同じ志・思想を持って、共感共鳴し集まってきた集団なわけです。初期の東京専門学校もやはりこういった要素が非常に強かったというふうに捉えるべきだろうと思います。そして、その私塾というのは、やはり近代的な学校とは本質的に異なるものだというふうに捉えなければいけない。あるいは、東京専門学校ができた時期というのは、まさしく私塾から近代的な学校へと、日本社会のさまざまな教育システムが切り替わっていく過渡期にあったということもできます。あるいは、東京専門学校は私塾の最後といってしまってもいいかもしれません。東京専門学校の創設というものをどう考えるの

か、あるいは早稲田大学の性格をどう考えるのかという際にはやはり、初期には大隈や小野、高田との精神的結合、あるいは思想を同じくする集団としての私的な学校、私塾としてスタートしたものが、近代的な教育機関としての大学へどのように脱皮し、変化していったのか、そのプロセスと葛藤というものを考えていかなければならないと思います。

実は、早稲田大学は四年前に一二五周年を迎えたわけですが、もうすでに一五〇年に向けて少しづつ動き始めています。いわゆる「早稲田大学の一五〇年史」というものを作ろうということで、もう動き始めているわけです。その際には、初期の専門学校からの性格をどう位置づけるのか、そしてそれが近代的な教育機関としてどう変化していったのか、そういった部分について捉え直しをしなければいけないのではないかと考えています。

もう、予定の時間が近づいてきますので、最後に少し今日の話をまとめて終わりにさせていただきたいと思います。

今日の話を一言で言うならば、大隈を少し近世人的に捉え返してみよう。彼の思想や行動様式の根底には、やはり近世的な素養というものを強く持っていたのではないかということをお話しさせていただいたわけですが、しかし、一方で彼は、近代人としての思想や行動様式も身につけていきます。彼は単に古い近世的なものを頑固に持ち続けたわけではありません。近世的なものを基盤にしながら、あるいは、そこを自分の土台にしながらも、近代的なものを受け入れていったというふうに考えるべきだろうということをお話をさせていただきました。

そうすると、大隈重信という個人における近代あるいは近代性の受容とはどういったものだったのか、彼の思想形成が孕んでいるある種の矛盾や葛藤といったものはどのように歴史的に捉えればいいのかというのが、今後の課題となってくるのではないかと思います。

繰り返しになりますが、その際に従来のような前近代的な思想、近世的な思想行動様式から完全に逸脱したと考え

るのは適切ではないというふうに考えています。儒教的な素養や近世人としての行動規範というものをベースにしながらも、彼が近代的知識、文明的知見を融合させながら、あるいは、そこと葛藤しながら政治活動を行っていった、少し言い方を変えるならば、近世人的な思考方法や価値観を強く持ちながらも、近代的な知見や政策に深く関わった人物であるわけですから、そこには矛盾やズレというものが必然的に包含される、そのことが彼の最大の魅力なのではないかと思います。単純に一つの価値観のみで動いていたのではなく、近世と近代という矛盾するものを自分の内部に抱えながら、しかし近代文明的な政策を推進していくという立場にあったということが、大隈重信の最大の魅力ではないかと考えています。あるいは、彼の矛盾やズレといったものが、彼が作った東京専門学校・早稲田大学の歩みとどのように関係したのかという点について歴史的に位置付け解釈し直すことが、大学史資料センターあるいは一五〇年史を執筆していくうえでの最大の課題ではないかと考えています。

そのような意味でも、近世人的な大隈の思想、人間としての基盤にあるものは、近世的な儒教的な考え方、あるいは行動様式を培った「場」こそ、佐賀という土地であり、さらに佐賀の中でのこの生家、彼が生まれた生家と彼が育ったこの空間といったものがあるわけです。彼が近世人としてまさしく人間形成をしたこの空間や「場」といったものが歴史的に持つ意味というのは非常に大きいのではないかと思います。さらにいえば、そういった「場」でこのような話をさせていただくことは、非常に貴重な体験であるし、このような機会を与えていただいたことに感謝をしております。

とりとめのない話になりましたが、お付き合いをいただきありがとうございました。